



向陵広場

発行号 第112号

発行日 令和5年3月16日(木)

発行元 向陵編集校友会

責任者 伊藤有司 (県商10回卒)

手記の一部 「希望と絶望」 白谷 茂 市商 16 回卒 (昭和 17 年 12 月繰上卒業)

第二次世界大戦で生死のはざまを彷徨った体験を手記にまとめた一部分を、原文のまま紹介します。

「追憶と反省の記」



白谷茂 (97 歳)

戦中戦後の時期に青春時代を送られた方は、時代の波に翻弄され苦難なそして数奇な運命を辿られた方が多かったですと存じます。

外地におられた方は元より内地の方も空襲などで命からがら生きながらえ波瀾万丈、苦しみを乗り越え一生を過ごされた事と存じます。

当時を振り返り私は、私なりの希望と絶望の人生の一部を此処に記し戦争が如何に人間性を否定し惨たらしい事実であるかを後世に伝えたいと存じます。

「希望を大陸に求めて」

小さなトランクに、私の下着日用品を詰めながら母は、本当にお前は親不孝だどつぶやいた。兄は既に海軍に取られ又今度は私が自分から外地へ行くと言い、朝から夜まで働きづめの両親にとって 17 歳の私は頼りな子供だったのだが、それが外地へと…母は悲しんだ。

昭和 17 年 12 月市立豊橋商業学校卒業、18 年 4 月、私はその頃同級生が皆国の為軍人志願又は国策で外地就職を奨励され私も大陸に憧れ満州で活躍すべく一人新京 (今の長春) に飛んだ。そして日系満州国人として日満商事 (株) に入社。その会社は大部分日本人でそれに中国人、朝鮮人、白系ロシア人と国際色豊かな会社で各国の言葉が入り交じり楽しい毎日でした。 当時の歌

(俺も行くから君も行け狭い日本にゃ住飽いた、海の彼方にゃ支那がある、支那にゃ 4 億の民が待つ)

そして暇をみては満州各地を見て廻りました。新京、奉天の街では物資も豊富で日本女子も未だ着物を着て戦時色はほとんど見られなかったが、東北興安嶺山裾の白城子開拓団 (主に浜松近郊の人で構成) では男の多くは召集され女子供ばかりで働いている姿や東満国境一面波では満蒙開拓少年義勇団の未だおっぱいの恋しい少年達が銃を持ち開墾している姿を見、悲壮感とともにひしひしと戦火の近づいているのを感じました。

新京もだんだん戦時色が深まり皆協和服 (国民服に似ている) を着、食糧等不足を感じる様になりましたが、若さの我々何処からか酒を調達し、夜は良く同級生の伊藤正敏、田中博と三人で酒を酌み交わし青春を謳歌し時代を論じました。伊藤正敏は満州映画 (株)、田中博は満州興農合作社に席をおいており、当時満州映画には日本で無政府主義者大杉栄を切り満州に脱出した甘粕大尉が社長しておりました。

伊藤正敏のお蔭で満映で女優ともお茶し又李香蘭とも会うことができました。(偶然であるが) 豊商同級生では早田光男氏が昭和 19 年 10 月召集満州牡丹江に入隊その後抑留されシベリア、コムソモリスク郊外ゴーリンで第 2 シベリア鉄道建設に使役され怪我をし 22 年 9 月 12 日帰国、西野安次 (旧木村) 氏もシベリアより無事帰国、鈴木伸治はカザフ共和国から帰還、平田登、山田久次、三輪野正義、斎藤利男等も大陸より無事帰還、特攻生き残りの兵藤吉朗氏も奇跡的に復員帰豊した。

又藤井宣一 (満鉄)、本多栄太郎 (満蒙毛織)、吉原敬 (満鉄)、住野淳二、成田喜代志、渡辺正美等が、大志を抱き続々渡満し満ソの露と消えた。(山田久次先生資料提供)

「消えた関東軍」

昭和 20 年 3 月 20 日、20 歳で満州に一人生活していた私に召集令状が来、奉天皇姑屯の野戦機関砲隊 73 中隊満州 13123 部隊に入隊した。部隊は 20 ミリ機関砲四門の川島中尉率いる独立中隊であった。そして 20 年 4 月 23 日奉天郊外渾河鉄橋でソ連戦車迎えるべく陣地を張った。

※註 (渾河は豊川くらいの広さの川で、明治 38 年の日露戦争で両軍が最後の死闘を繰り広げ日本陸軍が大勝利した激戦地である。) NHK テレビドラマ「坂の上の雲」を参照

(裏面に続く)

そこでは常識では考えられない古年兵の横暴があり若い命を散らした兵隊（自殺）もあったがその話は別の機会に譲る事とする。

当時いた関東軍百万の精銳は皆南方に転戦し弱体化しており奉天（瀋陽）のは 800 部隊（飛行隊）も飛べる飛行機は無く、我々も小部隊での守備となった。

その頃日本とソ連との間に結んだ、日ソ不可侵条約は破られ 8 月 8 日ソ連が満州侵攻 1 時間前に、宣戦布告をモスクワ中日大使に手交、160 万のソ連軍は国境を越え満州に攻め込んで来た。（遂に本国に宣戦布告の電文は届かなかつた。）東の国境牡丹江、北の国境黒河、西の熱河と関東軍は良く戦った、しかし武器の貧弱な我々はひとたまりもなかつた。満蒙開拓少年義勇団の子供達は、開拓団の人達は？（後で実に悲惨で苦しく悲しい数々の物語をきいたが）

「流浪の旅の始まり」

鉄橋警備中 8 月 15 日終戦の詔勅を聞いた時から私どもの果てしない数奇な人生は始まった。陣地を出、部隊は三日三晩雨の中を寝ずの行進を続けた。膝までぬかるむ原野を何処へ行くのか、何をするのか、唯隊長に従い黙々と行進する。途中国民党軍、共産軍、ロシア軍と残存日本軍のまんじ巴の戦闘となりどれが敵が味方か判らぬ中、辿り着いた山麓に陣地を築いて敵の来襲に備え逃げてくる邦人を匿い、ソ連と一戦を交える体制を整えた。ソ連兵も国民党軍も共産兵も積極的に攻撃してこない。時々プロペラのソ連機が空を飛び、ロシア兵が偵察に来る程度で間の抜けたような空白の毎日が続いた。少ない武器と食糧、200 名足らずの部隊での警戒、何時の間にか十月秋の気配が深まり冬の便りも聞かれる様になった。その間何故か私ども初年兵（幹部候補生）は上等兵に昇進した。（ボツタム上等兵か）

あれだけ威張っていた古年兵も元気が無く哀れなくらいだ。陣中こんな不思議な事があった。

終戦後日本円で幾らでも物が買えた。煙草、甘味料など自由に見える、しかし満州国紙幣は紙くず同然信用零、ルーブル紙幣は敬遠ぞみ。しかしそれは不思議な事実です。大陸の気候は長い冬から覚め僅かの春そして短い夏から一直線に冬となる。厳冬を前に防寒装備の希薄な我々は、止むえず山城を出、奉天にて銃を置いた。（終戦後二ヶ月戦っていた訳だ。）

「希望無き旅路」

ソ連軍の指示で奉天より貨車にのり一路北の街黒河を目指し（鉄道が破壊され南へ行かれない、北から日本に帰る）嘘の言葉を信じ初冬の国境の街黒河へと向かった。南満州はそれ程でなかつたが、北に行くにつれ激戦の跡が激しく駅など殆ど破壊され町は僅かに痕跡が残り人影もなく荒涼としていた。

黒々とした大地そして焼けた建物夜など灯火も無く静寂の世界唯焦げ臭い匂いと冷たい月、在留邦人は何処へ行ったのだろうか？　そして満州鉄道最果ての終着駅黒河に着いた。国境の街黒河どこか寂しい冬を迎えた異国の街であった。

「ソリの鈴さえ寂しく響く、雪の荒野よ町の灯よ
一つ山越しゃ他国の星が、氷つくよな国境」

黒河にいる一週間は毎日労働であった。満州にある鉄道施設、鉄材、物品ありとあらゆる物が貨車に積まれソ連に、戦勝国といえ国家的略奪で物寂しい限りだ。ソ連もレニングラードの攻防でようやくドイツを破るも疲労困憊滅亡寸前の国家であった様だ。そして 11 月ついに住み慣れた満州を離れ、船で黒龍江を渡り対岸ブラゴエチェンスクに上陸。其処は全く別の世界帝政ロシア時代の白いこぎれいな建物其の間に木造に石灰塗りの低い民家住む人も黒髪、金髪、茶髪、青い目、茶色目、黒い目人種の坩堝だ。

見るもの聞くもの総てが珍しい、然し全てがうらぶれて見える。一部ロシア民族を除きボロボロの貧しい衣服、そして靴、帽子、極東のロシア領でこんな状態ツンドラの中央アジアではどんなだろう。その駅にボロボロの貨車が沢山並んでいる。

「シベリア鉄道本線の旅」

ブラゴエチェンスクから愈々シベリア鉄道の旅がはじまった。今までとは違った言葉そして服装、喧騒の中二段に分けた貨車に乗せられ異国の汽車はシベリア鉄道をゆっくり走り出した。通訳によるとソ連領沿海州を通りナホトカから日本へ帰ると従って無論列車は東に向かう筈。夜の為良くわからないが月が反対で列車の走る方向がおかしい、夜明けとなり太陽が反対からあがる。車内は騒然となったがどうしようもない、騙された、始めて判った、これから何回騙される事か、何処へ行くのか？　もう冬は始まっている、我々の不安をよそにガタビシ、ガタビシ壊れそうな悲鳴をあげ列車は走りつづける。何処まで行っても不毛の冷たく真っ白い大平原生き物の姿緑の樹木など全く見られない冷たい死の世界だ、時々忘れかけた頃、駅、そして鉄橋を通る。其処には必ず兵隊が警備している。シベリア極東の大都市チタを過ぎたある朝、白く小さな玩具のような可愛らしい駅に列車は止まったバイカル駅だ。いよいよ世界一大きく深い湖バイカル湖に到着、列車はその南の端を走る。朝出て昼まだ湖を北に見ている。